

## [概要]

北陸地方は「真宗王国」と称される浄土真宗の篤信地域である。本稿は、北陸地方の一都である富山県氷見市を研究対象地域として取り上げ、浄土真宗寺院の分布状況とその形成要因に関して、歴史的経緯や宗教の性格、環境条件などとの関連性から考察した。浄土真宗は出家を必要としない在家仏教であることから、民衆が日常生活のなかで信仰できるため、人間の生活空間に分布している。また、氷見の浄土真宗寺院は浄土真宗本願寺派と真宗大谷派の勢力が拮抗しており、両宗派の分布に偏在性がみられた。鎌倉新仏教の伝播以前の氷見には多くの真言宗寺院が分布していたが、本願寺第8代蓮如が吉崎の地を拠点として布教活動をはじめたことがきっかけとなり、北陸地方に本願寺の勢力が急速に広まった。氷見においても真言宗寺院の改宗の動きが活発化し多くの本願寺派寺院が誕生した。蓮如の在任期間には氷見の沿岸部、第9代実如の在任期間では上庄川流域において真宗寺院が急増していることがわかった。幕府・藩の宗教統制政策および教団の組織化により、寺院は複雑な支配関係のなかにあった。このような支配関係は本願寺の東西分派の際に影響を及ぼすこととなる。本山である本願寺の動きに各地の有力寺院が同調し、その有力寺院に属する末寺も同調して改派する動きがみられた。この同調の動きが、氷見における本願寺派・大谷派の特徴的な分布形成の一要因となったと考えられる。